

複合終助詞の結合方式について*

—「かな」「かね」などを例に—

譚 嶢^{*1}

The Combination Form of Compound Particles at the End of a Sentence — Taking KANA and KANE for Example —

Zheng TAN^{*1}

^{*1} Beijing Institution of Technology

This research clarifies the functions of KANA and KANE, the combination form of compound particles at the end of a sentence. As we know, KANA and KANE always appears at the end of sentences and may suggest various nuances of meaning. In this paper, if we regard them as “xy”, generally they can be combined in the additional way like “x+y”; or can be combined in the uniting way like “[xy]”. It is the general pattern of compound particles at the end of a sentence.

Key Words : Particles at the End of a Sentence, Compound Particles at the End of a Sentence, Combining Way, Grammaticalization

1. はじめに

『日本語大辞典』によれば、終助詞は「助詞の一種。主として文の終わりに付いて、疑問・感動・強め・禁止などの意味を表わす語」と定義され、具体的に「か、な(あ)、さ、よ、ね、ぞ、わ、とも」などがあるということである。「財布、落としましたよ。」「今日はいいお天気ですね」のように、単独の終助詞は、会話において頻繁に用いられているが、終助詞の複合形もよく見られる。例えば「いったいどうなっているのかな」「ここに坐ってもいいですかね。」「中学校の時、野球やったよね。」「かな」「かね」「よね」のように文末に用いられる二つの連続する終助詞は「複合終助詞」と言う。

「かな」「かね」「かよ」「よね」「よな」「わよ」「わね」という7つの複合終助詞はよく会話で用いられ、近年、終助詞に対する研究は、構文上、談話分析、語用論的機能など、種々の角度から行われている。特に、単独に用いられる終助詞についての研究は多く行われており、多くの論文が報告されている。しかしながら、複合終助詞に関する研究はあまり行われておらず、報告されている論文も少ないのが現状である。

複合終助詞に関する研究の多くは各形式の意味・機能についてのものであり、これらの研究においては、複合終助詞の「構造方式」、つまり複合終助詞「x y」は、構成要素「x」の機能と「y」の機能の組み合わせ（ただの合計）の働きをするのか、それとも「x y」は構成要素の合計以上の意味があり、一まとまりとしての働きをするのか、ということをもっと明確にしておく必要があった。

本論文では、構成要素の組み合わせでは表せない、一まとまりになってから表す意味・機能は、複合終助詞の「プラスα意味」とする。したがって、プラスαの意味があるかどうかを基準に、上記の7つの複合終助詞を3つに分類し、「かな」は「融合的」な結合方式、「よね」「かね」「よな」は「過渡的」な結合方式、「わよ」「わね」「かよ」は「加算的」な結合方式として考察する。この3つの分類を表1に示す。

* 原稿受付 2014年2月28日

^{*1} 北京理工大学外国语学院日本語学科 (北京市海澱区中関村南大街5号 100081)

E-mail: tanzheng1979@hotmail.com

表1 「+ α 意味」による三分類

A融合型	「かな」	「プラス α 意味」が生じる
B過渡型	「よね」、「よな」、「かね」	条件つきで「プラス α 意味」が生じる
C加算型	「かよ」、「わよ」、「わね」	「プラス α 意味」が生じない

「プラス α 意味」は「融合」と見なされるか否かによって非常に重要な基準であるので、ここで「+ α 意味」を中心に、各タイプの特徴について次に改めて簡単に説明する。現代日本語で使用される「融合型」の「かな」は、「思考や情報処理の過程を表す疑い」という「プラス α 意味」を表し、一つのまとまりとしていろいろな形式の文末に現れる。条件付きで「融合的」になったり「加算的」になったりする「過渡型」の「よね」「よな」「かね」は、話し手が聞き手の反応を要求するか否かという文脈的条件によって、構成要素の結合方式が変わり、意味機能も違ってくる。「プラス α 意味」が生じ、一まとまりとしての働きをする場合は、単体の終助詞の意味の組み合わせの和では表せない働きをすることになる。「加算型」の「かよ」「わよ」「わね」は、実用法ではまだ「プラス α 意味」が生じていず、構成要素の担っている意味が承接される前とほぼ変わらず、すなわち単純に加算された意味機能の和で文末につき、その働きを果たす。

以下に融合型の「かな」と過渡型の「かね」を例に、分類について説明する。

2. 融合型の「かな」について

「かな」は一般的にすでに一体化し、一まとまりの形式として、日本語において使用されている。各辞書においても「かな」は見出し項目として扱われている。したがって「かな」においては「プラス α 意味」がすでに生じ、かつ構成要素の各自の意味機能に帰する用法はすでになくなったものと位置づけ、「融合型」の結合方式を持つ承接形だと考えることができる。

本節では主に「かな」における「プラス α 意味」は構成要素の「か」あるいは「な」に帰することができるかどうかを証明するという方法で「かな」の結合方式と意味・機能の関連を分析してみたい。

まず、次の「かな」の用例を見てみよう。

- 1) 「今日の会議は何時からかな。」
- 2) 「さあ、食事にしようかな。」

上記の1)と2)にある終助詞承接形「かな」については、一般的に「疑い」を表す表現だと言われて、同じ「疑い」というカテゴリーに属する「かしら、だろうね」とよく比較される。しかし構成要素の結合方式を見ると、それが「か+な=かな」なのか、それとも「かな」はすでに分けられない一まとまりの終助詞になっているのかに関しては研究が少ない。

今まで「かな」についての研究は、ほとんど「疑い」の意味を表す一表現として扱われている。直接に「かな」を一つの終助詞形式として取り上げて意味・機能について検討したり、類義表現(「だろうか」「かしら」「ではないか」など)と対照して検討したりしており、仁田(1991)^①、野田(2006)^②が挙げられる。それらは本稿では「融合的」な考え方の先行研究と呼ぶ。一方、「かな」を加算的な結合方式をとし、「か+な」は機能の和という研究には、調べたところ三宅(2000)^③が挙げられる。

次は二方向に分けて先行研究を紹介しながら分析してみたい。

(I) 加算的な考え方の先行研究と分析

三宅(2000)^③では、「かな」の意味は「「か」と「な」のそれぞれの意味から合成的に得られる」としている。まず氏は「な」の意味について考える必要があるとし、「な」は意味上「ね」の意味と同じだと述べている。そして氏は田窪・金水(1996)^④を引用し、「な」の本質的な意味については、田窪・金水による「ね」の意味の分析をほぼ全面的に採用している。以下は、三宅が引用した田窪・金水の「ね」についての記述である。

「ね」が結びついている心的操作の本質は、単なる聞き手の知識の想定ではなく、知識の算定操作であると考えられる。ここで問題となる計算操作は、判断に対する立証作業にあることを示す。ここでいう立証とは利用可能な知識のうちから関与的なものを検索し、それと突き合わせることによって妥当性を計算する、という作業である。

終助詞「ね」は、該当の命題の妥当性を計算中であるという標識である。

(中略)「ね」が立証作業中であることを表す標識であるということは、次のような例をみるとよく分かる。

3)「今、何時ですか?」「7時ですね。」

4)「彼女は君の恋人だろ?」「いや、ちがうね。」 (p468)

三宅はこの「ね」の意味の分析結果を同じく「な」の意味分析にあてはめていることができるとし、「かな」の意味を「疑問内容を検討中であるということの表明」するものと規定している。例えば

5)「誰が来るかな。」

のように、意味的には「通常の質問文とは異なり、聞き手への直接的な回答の要求を持っていない」「疑念表明の一種」と分析している。

また、「かな」における意味の拡張として、「弱い質問」(例6)と「丁寧さの加わった質問」(例7)の機能があると指摘している。

6)今度上映される「タイタニック2」って映画、面白いかな?

7)(幼児に向かって) ピカチュウ、好きかな?

このように三宅の研究は主に田窪・金水の研究結果を踏まえたうえで行ったものと言って良い。ここでまず問題なのは、田窪・金水の研究結果についてどうみるかということである。「ね」で表わす「該当の命題の妥当性を計算中の標識」という解釈は、3)と4)の用例に通じるが、「ね」のほかの使われ方にはあてはまらないことがある。例えば

8)「今日はいい天気ですね」

「そうですね、その通りですね。」

においては「ね」で表わす聞き手に「同感を求める」「同意を求める」という意味機能はいかにして解釈できるのだろうか。特に話し手が聞き手に対して果たす「働きかけ」の用法は「命題の妥当性を計算中」によってどのように理解すればいいのだろうか。要するに田窪・金水の見解は「ね」の性格を解明するのに多に貢献しているが、具体的に用いられる場面に活かすと抽象的すぎる部分があって十分に適用できないところがあると考えられる。

もう一つ、三宅の論述によれば「かな」の意味機能は「疑問内容を検討中」であり、問題ないように見えるが、引用された内容に従えば「疑問内容+妥当性計算・立証作業」というふうになると考えていいであろう。図式にすれば下記の通りになる。

{「誰が来るか」	な }
疑問内容	立証作業

しかし確かな情報や認識に対しては検討したり立証したりすることが可能であるが、疑問がある内容に対してはいかに妥当性を計算し、立証作業をするのであろうか。

ところが三宅はまた「かな」が表す意味機能について「疑念表明・弱い質問・丁寧さの加わった質問」という3つの独自の意味を規定しているが、これを見れば氏の考え方は単純な「か+な」という加算的な考え方ではなく、融合的な考え方の間で動揺しているのではないかと考えざるを得ない。

田窪・金水のこの見解に対して益岡(2007)⁶⁾はそれにも触れたことがある。益岡(2007)は「対話態度のモダリティ」について述べたときこう指摘している。

これらの文末詞の本質について、聞き手との関係の側面を捨象すべきであるとする見解もあるが、対話文専用の形式であり、聞き手に対する情報提示に際して用いられる、という基本的な性格はやはり認める必要があると筆者は考えている。(p77)

私は基本的に益岡の見解に同意する。以上で「な」や「ね」の「本質的な意味」をもって承接形の結合方式を「加算的」だと証明するには無理があるのではないかと考える。

(Ⅱ) 融合的な考え方の先行研究と分析

「かな」は一般的に「だろうか」「かしら」と一緒に「疑い」の一表現だと言われている。つまり「かな」はすでに一まとまりになって、一語的な形式になっていると認められているのである。本稿はこれを融合的な考え方と位置づける。次は「か」と「な」の単独機能の和によって「かな」で表わす機能を解釈できるかどうかという方法で、「かな」の用法と結合方式を明らかにしたい。

まず「疑い」とは何であろうか。日本語記述文法研究会(2003)^⑥では、疑いの疑問文は「話し手にとって不明の点があることだけを表すものであり、聞き手に問いかける機能を持たない」と規定し、さらにそれを「独話的な用法と対話的な用法がある」に分けている。その中、「疑いの疑問文は本来的には聞き手へ問いかける機能を持たないので、独話的な用法が基本である」とし、「その独話的な性質を利用して、対話的な用法が派生される。対話的な用法には、質問として用いられるものと応答として用いられるものがある」と指摘している。

承接形「かな」は、「疑い」の意味機能を表す常用の形式である。次の部分で主に独話的な用法と対話的な用法に分けて「かな」の用法をまとめながら分析する。

(一) 「かな」の独話的用法

日本語記述文法研究会(2003)^⑥では、独話的な疑問文には、「判断不明、思考過程、疑念」という3つの用法がある。これらの用法は独話や心内発話として用いられるのが普通である。

ア)判断不明の用法は、その命題の真偽や欠けている情報について、話し手がまったく見当がつかない状態にあることを表すものである。

9)もう卒業か。一体、今まで何をしていたのかな。

イ)思考過程の用法は、疑問の解消に向けてありうる可能性を検討していることを表すものである。

10)鈴木はそろそろ新幹線に乗った頃かなと思った。

ウ)疑念の用法は、実際のところはまだ分からないが、その命題に対して否定的な方向(疑念)に傾いているということを表すものである。

11)こんなに忙しくて、明日は本当に遊びに行けるのかしら。(p35-36)

その「疑い」の機能を表わす形式は「かな」だけではなく、他に「かしら、だろうか」などもあるが、ここは「かな」を考察するため、「かな」を含む用例を抽出して紹介した。つまり、「かな」は「判断不明、思考過程、疑念」という3つの意味機能を表すと考えられる。ただウ)の「疑念」の用法に関しては「かな」ではなく「かしら」の用例だけが提供されているが、本稿は「かな」も「疑念」の用法を有するものだと考えて、

11')こんなに忙しくて、明日は本当に遊びに行けるのかな。

のような用例はこの用法に当たる。

9)、10)と11')の用法において、「か」と「な」の単独の意味機能の和によって解釈されうるのであろうか。「か」と「な」の単独用法を説明しておく。

「か」「な」の単独用法に関する意味機能の先行研究は数多く、その代表として陳(1987)^⑦、仁田(1991)、益岡(1991)が挙げられるが、いずれの論に従っても決定的な違いが見られないので、意味を以下のようにまとめる。

「か」：「疑い」あるいは「問い」という不確かさを表す。(ただし、他に自問納得、反語、依頼など派生的な意味がかなり存在する)

「な」：a相手に同意を求める。あるいは返答を促す。「この頃、ろくに一緒に飯食うた時がないな。」

b独り言、または内言として気づきや感動を表す。「もうせいぜい二、三年生きていたら、あるいはやったかもしれないな。」

c相手の前で詠嘆を表す。「いい夜だな。」

「かな」の疑いの用法では聞き手に応答を求めないというのが特徴であるから、「な」aの用法は不適用なことになる。「か」もここで「問いかけ」の意味を持たないことから「不定表明」だと考えられる。そうすれば「な」の用法は「感動・感嘆・詠嘆」になる。この「か」と「な」の単独用法をもって前記の「かな」の例文9)、10)と11')に当てはめてみよう。

具体的にもし「か」と「な」がそれぞれ単独の意味を持つものだと考えると、「か+な」は9)、10)と11')の例文においていずれも「不定+詠嘆」になるのである。「詠嘆」は「深く感心・感動する」という意味で、「不定・不確か」な事柄に対して「詠嘆」の気持ちを示すことはできないはずである。例えば

10)鈴木はそろそろ新幹線に乗った頃かなと思った。」

において「鈴木はそろそろ新幹線に乗った頃か」という不明なことに対して、どのようにして「詠嘆的」に発話できるのであろうか。さらに通常「不確かなこと」について「感動・詠嘆」することはないのではないかと考える。そのためこれらの「かな」用法における「な」は単独用法の「な」ではないと推定される。

以上、独話場面における「かな」は「な」が元の単独用法では働きをしにくいと分析した。次の部分で対話文における「かな」について分析する。

(二)「かな」の対話的用法

日本語記述文法研究会(2003)^⑥では、対話における「かな」の使われ方について質問文的な用法と回答文的な用法があると述べている。

ア)通常の疑問文のように応答を強制するわけではないので、聞き手が答えを知らなくても問題なく、また、聞き手が答えを知っていれば応答が期待できるというのが疑い文による質問である。

12)「佐藤は、本当のことをどこまで知っているのかな？」

「さあ、わからないな。よく知らないと思うんだけど。」

イ)疑いの疑問文は聞き手に何らかの情報を伝える機能を持つこともある。補充疑問文に対する応答文として、知ってはいるもののはっきり言い切れない情報を伝える時に用いられる。

13)「昨日は誰が来ていたの？」

「そうだなあ。山本と佐藤と鈴木かな。」 (p36-37)

12)と13)はいわゆる対話文における「かな」用法である。これらの「かな」文では、「か」の意味機能は「不定の表明」だと考えていいわけであるが、いずれにおいても「な」は単独用法の「詠嘆・感嘆」という意味は読み取れないと思われる。ところが「な」の「詠嘆・感嘆」の用法については言語使用者によって異なる理解がある可能性があるため、分かりやすくするために、対話における「な」の意味をもっと詳しく見てみよう。

野田(2006)^⑥では、「聞き手となりうる人物の存在を意識したうえで、独話であるかのように発話されたもの」を「擬似独話」(ここの「対話用法」だと考えられる)とみなしている。「擬似独話」を表す表現には「な」と「かな」があって、「な」の用法は以下の通りである。

a心情をありのままにのべている：

14)ちどり「演説ぐらいできますよ。女優ですからね」

富子「ぜひお願いします」

藤村「楽しみだなあ。ひとつ名調子でバンバンやってくださいよ。うちの清川はきまじめで、どうしても演説が固いんですよ。」

b心情などを独話的に表現しながらそれを聞き手に認識させようという意図がある。羨望を表すもの、不満を表すもの、聞き手に間接的に行為を促すものなどある：

15)「いいな」

16)「あああ、差がついちゃったなあ」

17)「あれがほしいな」

c聞き手を非難する：

18)「気持ち悪いなあ」

19)(頬を張られて)「痛いな」

20)「またひどいなあ。真剣なんだぞ。」 (p199-200)

それに対して、「擬似独話」における「かな」は「思考や情報処理の過程を表す」ものと指摘している。

21)「あー、じゃー、そのサイズの融通性とか考えてくださいとか、そういう話だったのかな」

22)「そういう癖が確かにありますね。本当の感情を出したら事態がめちゃくちゃになるんじゃないかという不安かな。」 (p197)

このように話し手が対話文においても独話の形を選んで発話するときに「な」か「かな」を用いることがあるということを指摘している。このような用法は「な」と「かな」の対話的用法でもありと考えられる。

野田(2006)²⁰によれば、「な」はa—cの提示したように「な」の前の文の内容によっていろいろな心情を表すことができるのに対して、「かな」は「思考や情報処理の過程を表す」を表すものである。だから、「な」と「かな」はその場合、並列に対照的な関係にあると考えていいであろう。もし「かな」の結合方式は「か+な」であつたら、構成要素「な」の意味はa—cの中の3つのいずれかに相当するはずである。しかしa—cの中の3つの意味機能が、「かな」が表わす「思考や情報処理の過程」においてはどうしても読み取れないのである。

以上対話における「な」の単独用法によって「かな」の中の「な」の意味は解釈しにくいと判断される。「かな」が表す「思考や情報処理の過程」という意味用法は、独話で用いられるし、そして対話の場合、擬似的な独話をするように用いられる。したがってそれは「かな」の基本的機能だと言えよう。

以上の分析から分かるように、独話的用法でも会話的用法でも「思考や情報処理の過程」という意味機能は「かな」の基本的な意味機能であることから、本稿は「思考や情報処理の過程における疑い」を表すという働きを「かな」の独自の働きと考える。この働きは、単なる構成要素の「か」と「な」の意味機能の和で解釈できない、そして「か」か「な」に帰することができないものである。要するに、「かな」の結合方式は「融合的」であり、「か」と「な」はすでに分けられない状態である。

3. 過渡型の「かね」について

「ここに座っていいですかね。」のような文における終助詞の承接形「かね」は、日常生活に頻繁に使用されているが、一つの表現として具体的に扱う研究はまだ少ない。特に内部要素の結合状態や使用条件などからの考察はあまり見られない。

そこで、承接形「かね」の使用実態を整理し、それに基づいて「かね」の意味機能と結合方式について分析したい。まず「かね」がどのような文によく現れるかについて分析する。本稿の調べによれば、「かね」が用いられる用例を質問と疑問の二種類にタイプ分けすることができる。

(i)質問タイプ：

23) (ルームメートの対話)

「今の時間おもしろいやつありますかね。」

「ワイドショーじゃないか、大体。」

「おもしろいですかね。」

「年とってくるとね、おもしろく感じるよ。」

24) 「おっ、野性のバナナだ。食べられますかね。」

「まだ無理みたいだなあ。」

25) (友達への質問) どうです、もうかりましたかね。

(ii) 疑いタイプ

26) そんなこときみにできるかね。(反語)

27) 「〇〇さんは最後に合コンをしたのはいつですか。」

「えっと、この間の日曜日ですかね。」

28) (図書館で人の隣の椅子に座ろうとするととき独り言で)

「ここに座っていいですかね。」

「質問タイプ」の23)－25)は聞き手に具体的な答えを求めているのが特徴である。その問いかけの性質は「か」で表われ、「ね」は話し手と聞き手の間に一体感を引き出す。強いて言えば「ね」を取り消しても文の意味はほとんど変わらない。

一方、それに対して「疑いタイプ」の26)－28)は常に答えの中や独り言で出現する。話し手が発話内容に不確かなところがあって、自問か疑いをしていると思われる。「か」は当然なことで「不定・不確か」を表わすと考えていいが、「ね」は通常の「同感・同意求め」や「確認要求」では説明ができないのである。特に独り言の場合、自らに疑念を示すので、聞き手めあての「ね」の意味機能が読み取れないということである。

このように「かね」の用例は「質問タイプ」と「疑いタイプ」とに分かれることが分かった。

以下で両タイプの文の分類基準や、両タイプの文における「かね」の意味機能について分析する。それを踏まえて「かね」の独自の意味機能を明らかにしたい。まず両タイプの用例をもう一度見てみよう。質問タイプの用例は通常問いかけ文と同様で、聞き手から答えを期待して、命題内容の不確定を解決しようとするものである。それに対して、疑いのタイプの用例は命題内容への「疑い」を表明するだけで、答えは求めているない。

二つのタイプの分類基準は聞き手に答えを求めるかどうかというところにあるのだと考えられる。それを明らかにするために、まず「疑い」に関してもうすこし具体的に説明を加える。仁田(1991)^①では「疑い」の特徴について以下のように述べている。

「疑いの文」として取り出す一群は、「疑い」といった文法的意味を含むものの、問いかけ性がなく(あるいは極めて希薄で)、単に「疑い」を表出・述べ立てているのである。(p144)

そして常用表現は「かな」「かしら」などを挙げている。つまり「疑い」の特徴が「問いかけ性がない」ことにあるということは、「聞き手に答えを求めている」と理解していいであろう。周知のように「質問」の特徴は「聞き手に答えを求めている」ことにある。だから両タイプに分類する基準が「聞き手に答えを求めるかどうか」ということにあるのだと考える。

また両タイプの文における「かね」の意味用法について分析したい。「質問タイプ」例23)－25)に用いられる「かね」は、「か」が表す「問いかけ」の機能と、「ね」が表す「同感作り」の機能と組み合わせて、両機能の和で「同感を作りながら質問をする」という意味用法である。

それに対して、例26)－28)のいずれも文末に「疑い」の意味表出が読み取れる。それは「か」によって表されているのか、「ね」によって表されているのか、それとも「か」と「ね」の機能の組み合わせによって表されているのか。本稿は「疑いタイプ」の文に用いられる「かね」は、すでに「か」が表す「不確か」などの機能と「ね」が表す「同意・同感・確認」の機能の和だけで表せない独自の「疑い」の意味機能を表していると考え、「かね」が融合して一まとまりになったものとする。

さて「かね」で表わす「疑い」の意味はどんな特徴があるのか。「かな」と比べながら説明したい。結論から言えば、対話での意味は「聞き手に配慮がある疑い」だと指摘することができよう。

同じ「疑い」を表わす「かな」を使って独話しているように発話すると、自分の世界に入り、聞き手との心理的距離がより遠く感じられることがある。

29)「今何時かな。」「えっと、七時です。」

30)「春日さんは自分がさんまさんより優れているところはどこだと思いますか。」「そうですね。人気ってとこかな。」

一方、「聞き手に配慮がある疑い」という特質がある「かね」が用いられると、聞き手と同じ空間にいるように働き、聞き手との心理的距離がより近いと感じられる(それは「ね」のももとの性質から由来されると推測できる)。だからこういう場合よく「です・ます」体が使われるのが多い。

31)「今何時ですかね。」「えっと、七時です。」

32)「春日さんは自分がさんまさんより優れているところはどこだと思いますか。」「そうですね。人気ってとこですかね。」

要するに、言語使用者が「自問・疑い」をする際、29)と30)のように既存する「かな」を使っても「聞き手への配慮」が足りないと感じるため、31)と32)のように「かね」を使うようになったのである。言い換えれば「かな」によって表わす「疑い」では聞き手に十分に配慮があるという話者の気持ちが伝えられないから、「かね」を使ってそれをカバーしたということである。

このように、「かね」が融合してから表す「聞き手に配慮がある疑い」という意味機能はすでに構成要素の「か」にも「ね」にも帰することができないものである。したがって「かね」は一まとまりの表現として、他の終助詞「かな、だろうか、かしら」などの用法と同様に、「疑いの表現」類に位置づけられたいと思われる。また「かね」と「かな」の意味上の張り合いは、事実上承接形「かね」の形成・発展と緊密に関わっている。終助詞承接形の形成プロセスにおいて、「かね」は「かな」がカバーしない意味機能をカバーしていくことによって、だんだん文法化して、一まとまりになってきたのだと考えられる。詳しい分析は第三章で述べる。

このように承接形「かね」は、結合方式によって意味機能が変化することが確認されたと思う。それを図式にすれば以下のようなだろう。

A加算的な「かね」:「命題」+か+ね

(命題に関する不確かさを聞き手とともに持ちながら、聞き手からの回答を求めている)

C融合的な「かね」:「命題」+かね

(問いかける意図なく、回答を期待しない。聞き手に配慮がある疑いという意味機能を表す)

つまり、「かね」はコンテストに「問いかける意図」の有無によって、「加算型」になったり「融合型」になったりするので、「過渡型」だとする。似ている結合方式を持つのはまた「よね」「よな」があり、それに対して「加算的」な結合方式しか持たない複合終助詞は「かよ」「わよ」「わね」である。

4. 終わりに

以上のように複合終助詞の結合方式を三分類して、融合型の「かな」と過渡型の「かね」について詳しく説明した。また認知言語学の文法化理論から見れば、複合終助詞の文法化レベルの違いとも関係があると思われる。つまり、「加算型」<「過渡型」<「融合型」という順に、複合終助詞「x y」の文法化レベルが高くなっているということである。それに関してはこれからの課題として研究したい。

文 献

- (1) 仁田義雄, 日本語のモダリティーと人称, (1991), ひつじ書房.
- (2) 野田春美, “擬似独話が出現するとき”, 日本語文法の新地平2文論編, (2006), くろしお出版.
- (3) 三宅知宏, “疑念表明の表現について—カナ, カシラを中心に—”, 鶴見大学紀要第1部国語・国文編, Vol.37, pp.8-21.
- (4) 田窪行則, 金水敏, “対話と共有知識——談話管理理論の立場から”, 言語, Vol.25, No. 1 (1996), pp. 30-39.
- (5) 益岡隆志, モダリティの文法, (1991), くろしお出版.
- (6) 日本語記述文法研究会, 現代日本語文法〈4〉第8部・モダリティ, (2003), 日本語記述文法研究会
- (7) 陳 常好, “終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞”, 日本語学, Vol. 6, No.10 (1987), pp. 93-109.

(平成 26 年 3 月 31 日受理)